

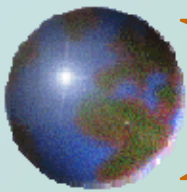


当社穀物ビジネスの現状と展開について ～穀物の世界需給情勢の変化を見据えて～

2008年8月6日

Marubeni
CORPORATION

注)本資料にて開示されているデータや将来の見通しに関わる記述は、本資料発表日現在における入手可能な情報及び将来の業績に影響を与える不確実な要因に関わる過程を前提としております。実際の業績は、今後様々な要因によって異なる結果となる可能性があります。
なお、本資料利用の結果生じたいかなる損害について、当社は一切責任を負いません。



目次

Marubeni

第1部:世界の穀物市場の現状

P1

- ・逼迫する世界の穀物需給 P2
- ・中国などの人口大国の影響 P3
- ・国・地域別の生産量・消費量 P4
- ・米国の生産量の増加 P5
- ・中国における畜産物の生産と消費 P6
- ・中国におけるトウモロコシ、大豆の消費量の増加 P7
- ・大豆生産は、南米と米国が逆転 P8
- ・バイオ燃料との穀物争奪 P9
- ・日本の穀物輸入について P10
- ・世界的供給不足から穀物相場が急騰 P11
- ・世界の穀物市場の現状(まとめ) P12



第2部:当社の穀物分野について

P13

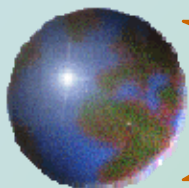
- ・穀物分野の主要系譜 P14
- ・食料部門組織図(2008年4月現在) P15
- ・2007年度通期 部門別連結セグメント情報 P16
- ・当社の穀物分野での強み① P17
- ・当社の穀物分野での強み② P18

第3部:今後の展開について

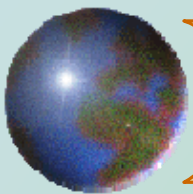
P19

- ・当社の世界販売戦略と産地対策 P20
- ・今後の展開について P21





世界穀物市場の現状

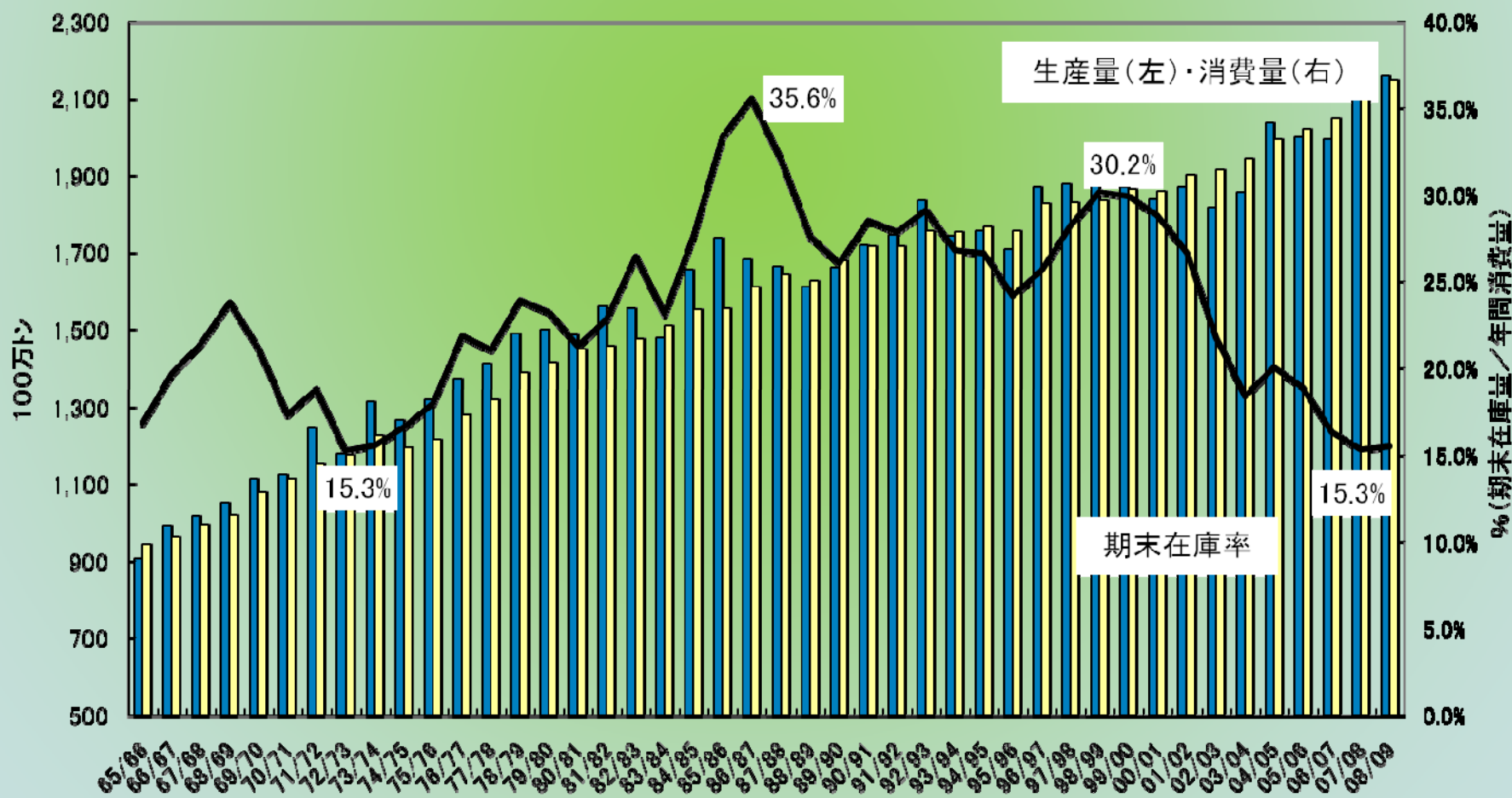


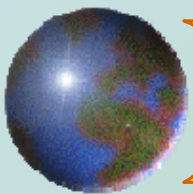
逼迫する世界の穀物需給

Marubeni

世界の穀物の生産量、消費量は60年代より年々増加している。
08/09年度期末在庫率は15%台と非常に低い水準となっている。

世界の穀物需給および在庫率

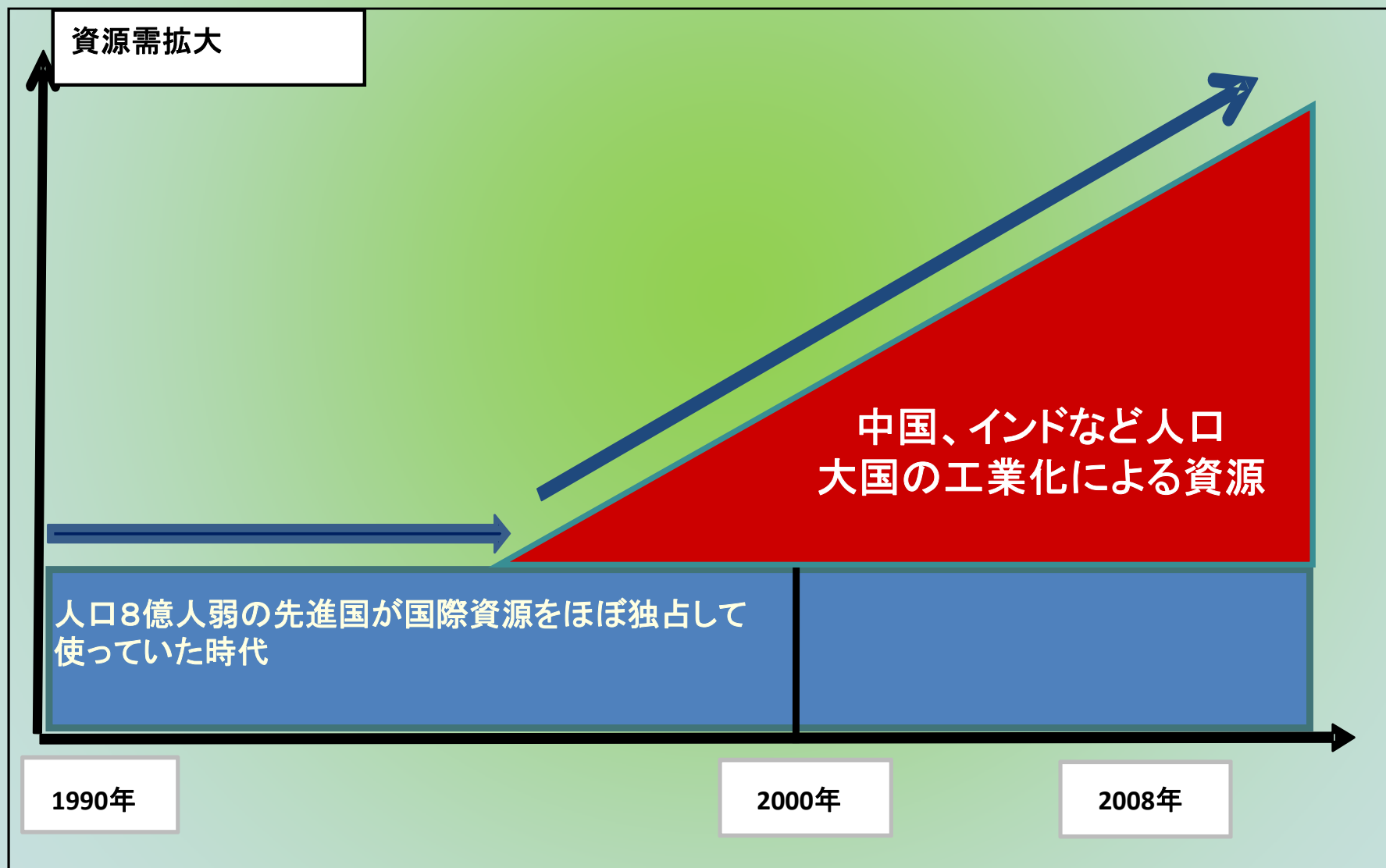


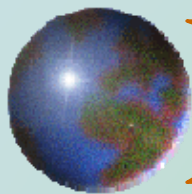


中国など人口大国台頭の影響

Marubeni

近年の消費量の増加は、従来の先進国での消費に加え、中国、インドなどの人口大国の工業化による増加による事が主因である。





国・地域別の生産量・消費量

Marubeni

小麦 : 全世界での生産量は、2007年の豪州、欧州での早魃要因を除くと近年は横這いであったが、2008年度は欧州、中国で増産の見込みである。

中国、インドでの生産は増加しているものの、国内での消費が中心の為、輸出は行われない。

米国ではトウモロコシ等への転作が進んでいるが、2008年度は増産の見込みである。

大豆 : 全世界の需給では、最も消費が伸びている中国の需要を近年生産が増加しているブラジルからの輸出で賄っている。

トウモロコシ : 全世界での生産量、消費量はともに伸びている。

消費の伸びている中国、ブラジルは自国の生産増で賄っているが、今後中国は輸入国に転ずる可能性がある。

米国では生産は伸びているが、バイオ燃料の製造向けの需要が大幅に伸びている。

【小麦】

生産	百万 MT			
	2001/2	2004/5	2007/8	2008/9
世界	582	629	611	664
EU27 ※	91	137	120	142
中国	94	92	106	114
旧ソ連11国 ※	62	86	93	102
インド	70	72	75	77
米国	53	59	56	67
ロシア	47	45	49	54
カナダ	21	26	20	25
豪州	25	23	13	25

内需	百万 MT			
	2001/2	2004/5	2007/8	2008/9
世界	586	610	616	647
EU27 ※	92	115	120	129
中国	109	102	101	107
インド	65	73	76	78
旧ソ連11国 ※	69	73	76	77
米国	33	32	31	36

輸出	百万 MT			
	2001/2	2004/5	2007/8	2008/9
世界	108	111	105	120
米国	26	29	32	27
旧ソ連11国 ※	14	15	22	27
カナダ	16	15	14	17
ロシア	4	8	12	13
EU27 ※	11	14	9	16
豪州	16	15	8	15

輸入	百万 MT			
	2001/2	2004/5	2007/8	2008/9
世界	108	110	110	118
北アフリカ	17	18	21	20
東南アジア	9	10	10	11
ブラジル	7	5	7	7
EU27 ※	10	7	7	5

【大豆】

生産	百万 MT			
	2001/2	2004/5	2007/8	2008/9
世界	185	213	219	238
米国	79	85	70	82
ブラジル	44	51	61	64
アルゼンチン	30	39	47	48
中国	15	17	14	16

内需	百万 MT			
	2001/2	2004/5	2007/8	2008/9
世界	184	206	232	235
米国	51	51	52	54
中国	28	40	48	48
アルゼンチン	22	29	38	40
ブラジル	27	32	35	33

輸出	百万 MT			
	2001/2	2004/5	2007/8	2008/9
世界	54	65	76	76
ブラジル	15	21	25	30
米国	29	30	31	27
アルゼンチン	6	10	12	11

輸入	百万 MT			
	2001/2	2004/5	2007/8	2008/9
世界	54	65	76	75
中国	10	26	34	34
EU27	—	16	15	15

【トウモロコシ】

生産	百万 MT			
	2001/2	2004/5	2007/8	2008/9
世界	597	708	789	775
米国	241	300	332	298
中国	114	130	152	153
ブラジル	36	35	58	57
EU27 ※	39	53	48	57
アルゼンチン	14	20	21	24

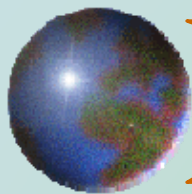
内需	百万 MT			
	2001/2	2004/5	2007/8	2008/9
世界	621	685	774	795
米国	201	225	263	267
中国	122	131	149	157
EU27 ※	42	52	62	62
ブラジル	35	39	43	45
メキシコ	25	28	32	33

輸出	百万 MT			
	2001/2	2004/5	2007/8	2008/9
世界	74	78	99	92
米国	48	46	62	51
アルゼンチン	11	15	15	16
ブラジル	2	1	11	11
中国	9	8	1	1

輸入	百万 MT			
	2001/2	2004/5	2007/8	2008/9
世界	73	77	95	90
日本	16	16	16	16
メキシコ	4	6	10	11
韓国	9	9	9	9
EU27 ※	3	3	13	7

※EU27: 2001年度はEUは15ヶ国、2004/5年度は25ヶ国、2007年度以降は27ヶ国。 ※旧ソ連11ヶ国: ウクライナ、ベラルーシ、カザフスタン等、ロシアを除く旧ソ連邦の11ヶ国 (FSU-12)

(資料) 米農務省需給予測



米国の生産量の増加

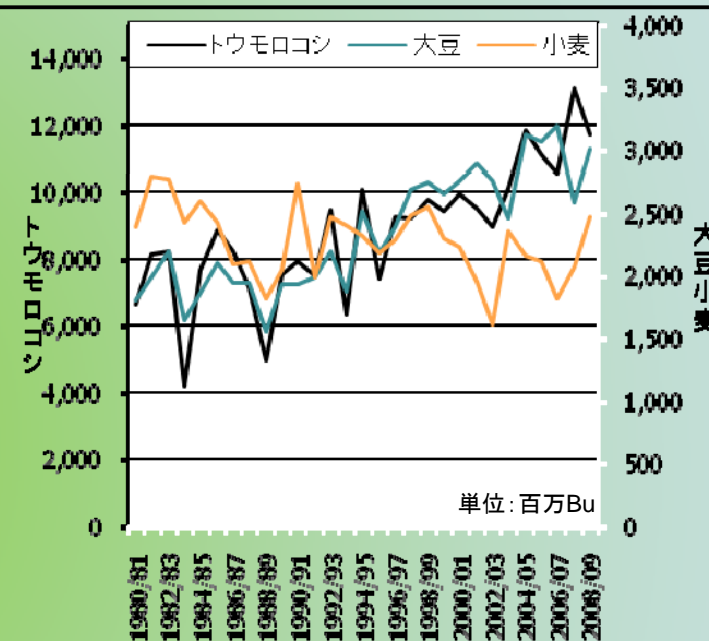
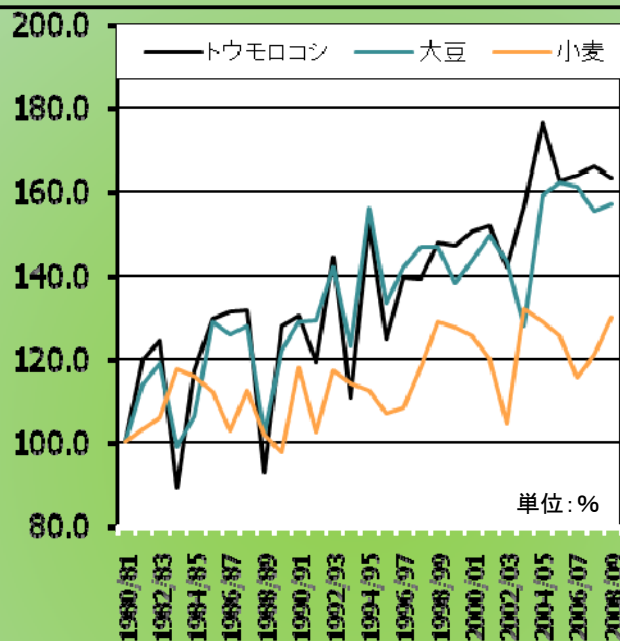
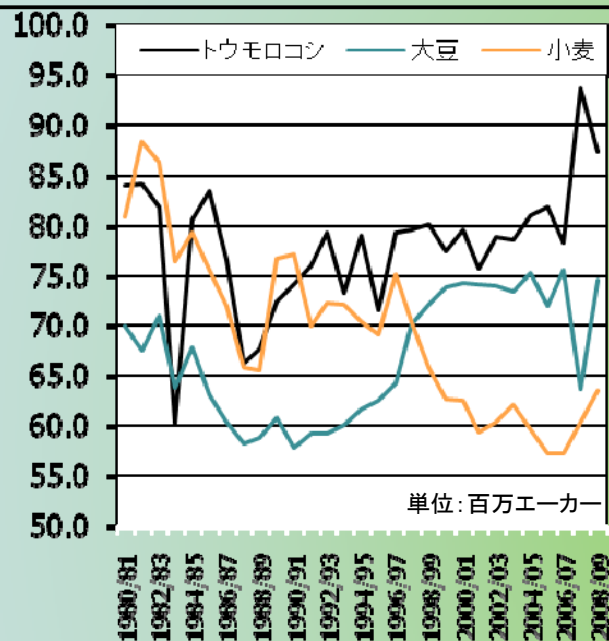
Marubeni

作付面積

単位収穫指数

(1980年を100%とした場合の伸び率)

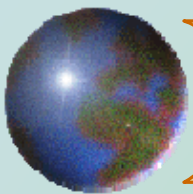
生産量



世界のトータル面積での大幅増加はない。
1990年代後半より小麦から大豆、トウモロコシへの転作が進んでいる。

小麦、大豆、トウモロコシとも灌漑、肥料、遺伝子組換え等、技術的な要因により、単位面積当たりの収穫量は増加している。

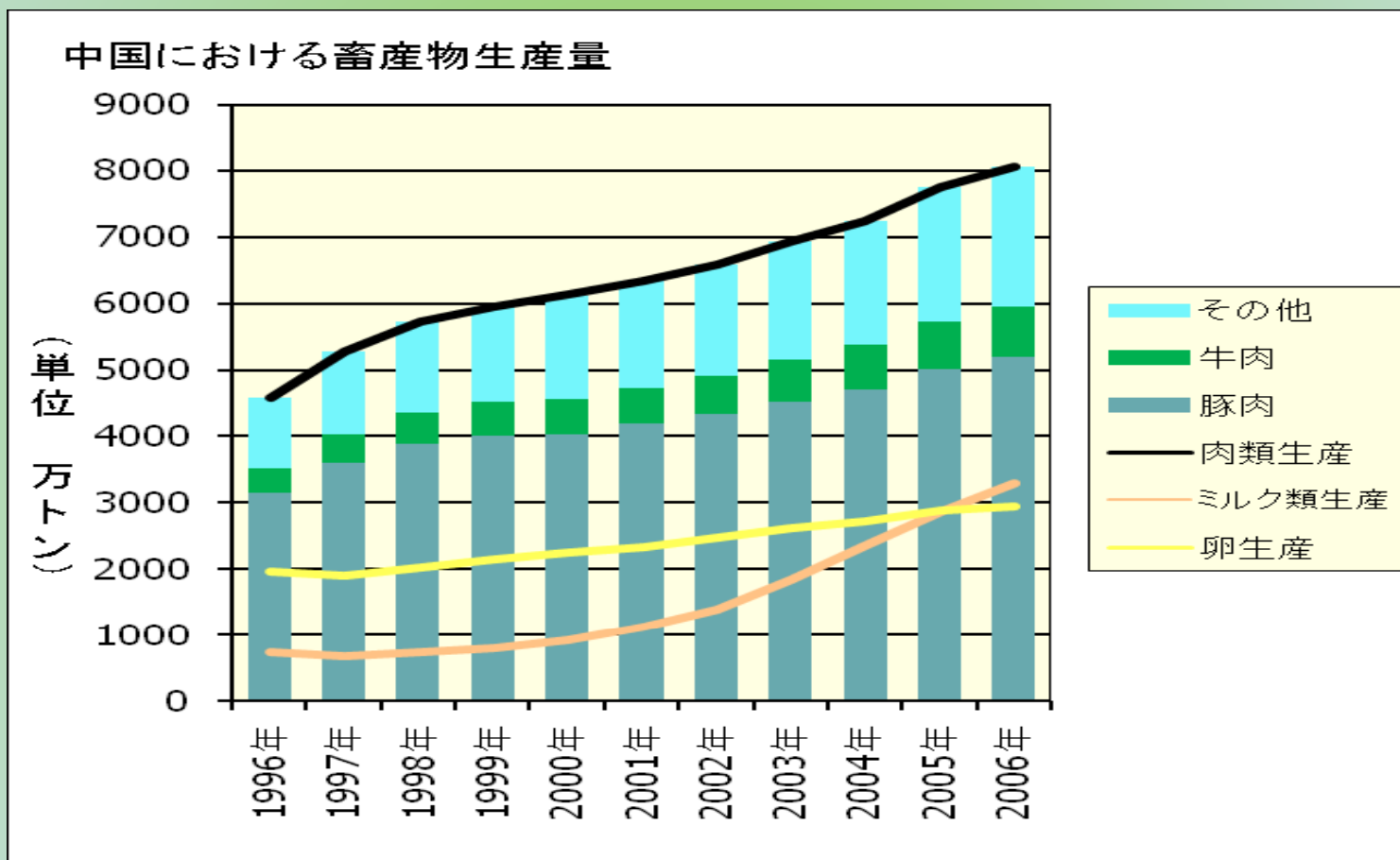
トウモロコシ、大豆の生産量は、作付面積及び、単位収穫量の増加により大きく伸びている。



中国における畜産物の生産と消費

Marubeni

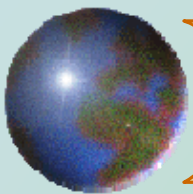
穀物を餌とする畜産物に関し、中国では生産・消費とも右肩上がりでの増加となっている。
肉1kgを生産するのに必要な飼料の量は、その4～11倍も必要となる。



(参考)

肉1kgを生産するのに必要な飼料量(トウモロコシ換算)

□牛肉11kg □豚肉7kg □鶏肉4kg

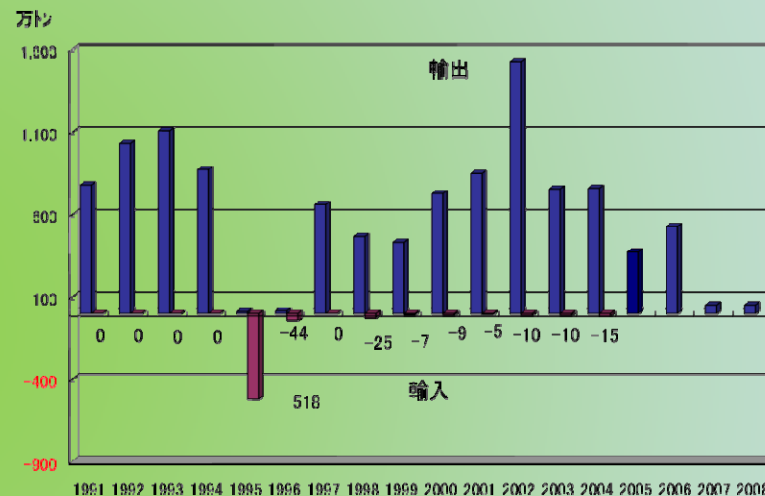
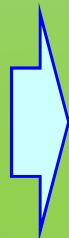
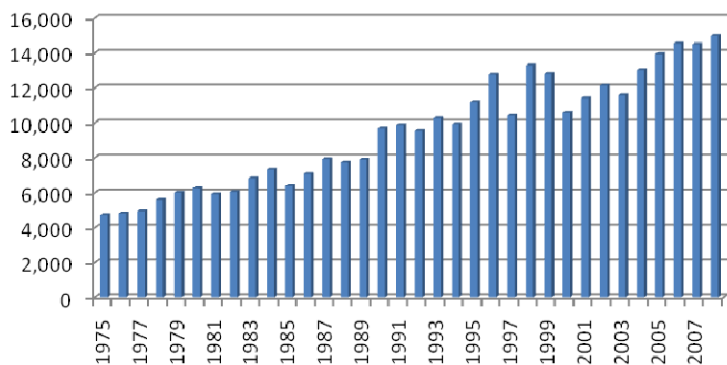


中国におけるトウモロコシ、大豆の消費量の増加

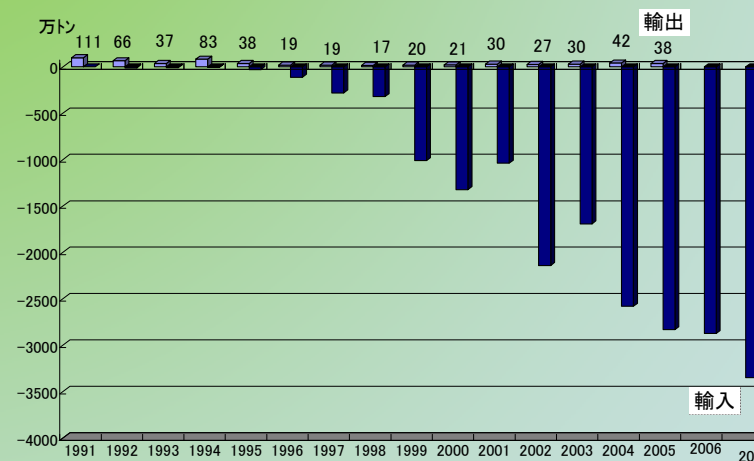
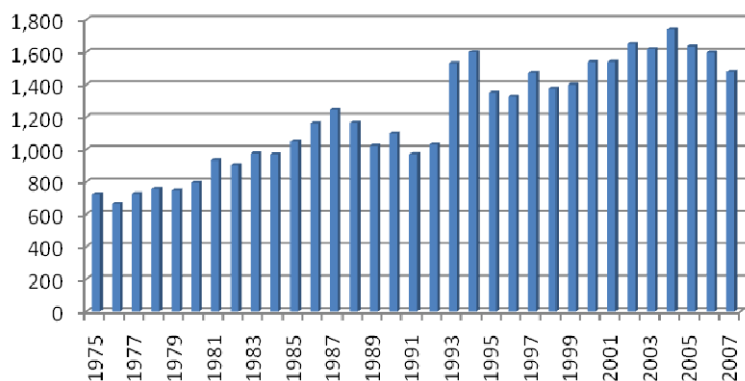
Marubeni

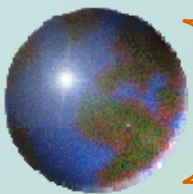
中国において、トウモロコシ、大豆とも生産量は1970年代より増加しているものの、旺盛な国内需要により需給が逼迫し、トウモロコシにおいて近年は実質輸出がなくなり、今後輸入国に転ずる可能性がある。大豆については1990年代後半より輸入国に転じ、今では世界最大の輸入国となっている。

トウモロコシ生産



大豆生産



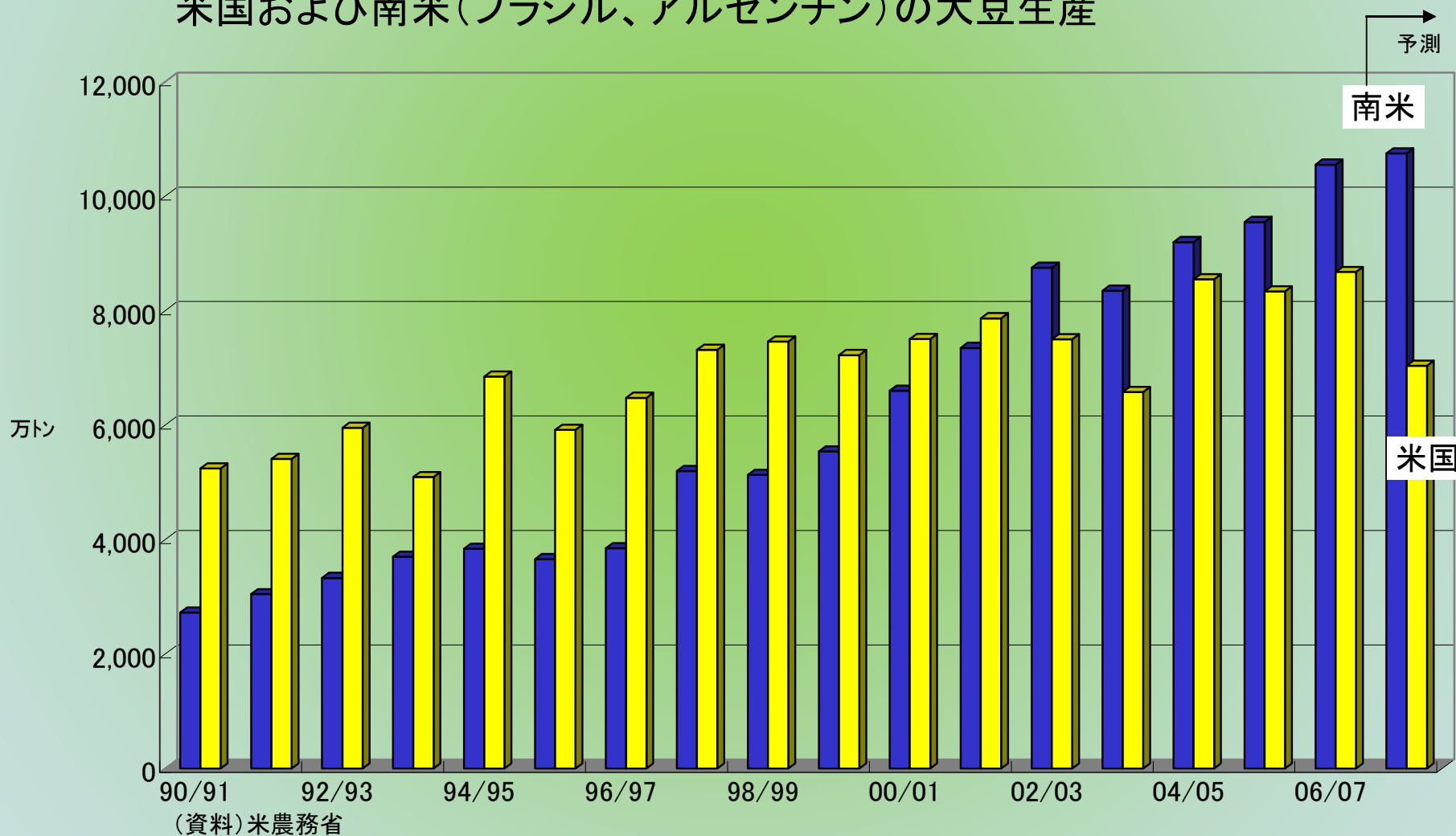


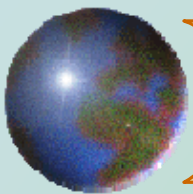
大豆生産は南米と米国が逆転

Marubeni

生産意欲が盛んな南米の生産量が米国を逆転

米国および南米（ブラジル、アルゼンチン）の大豆生産

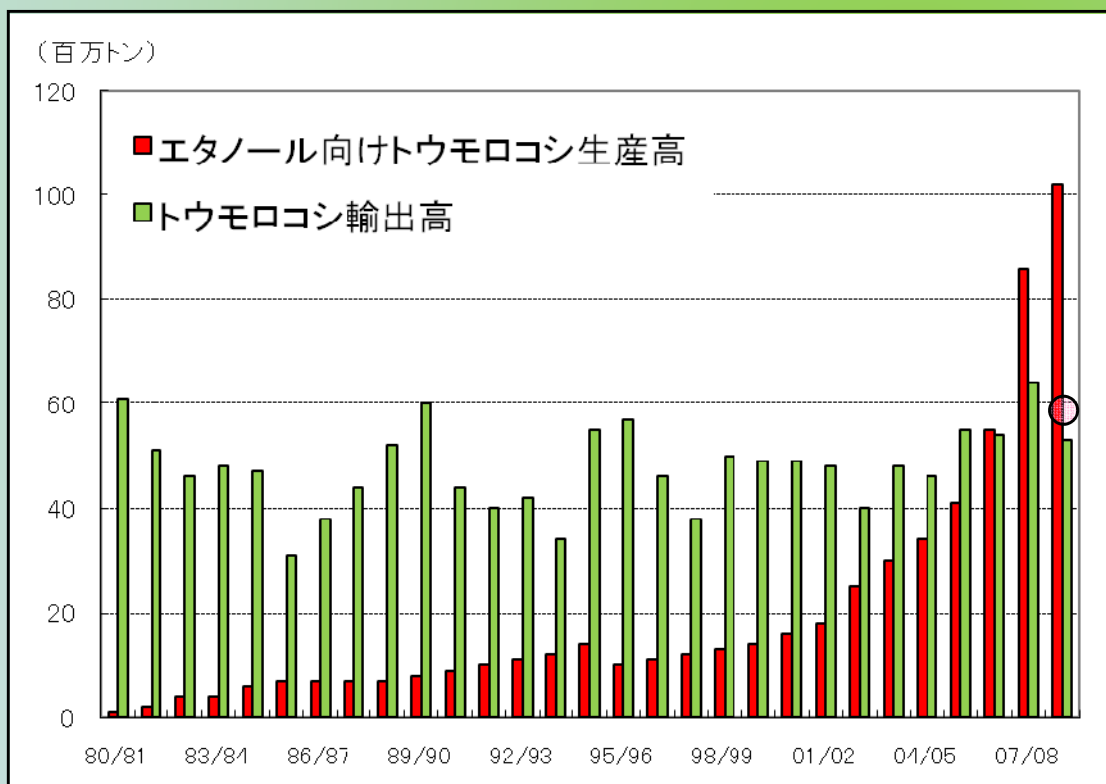




米国のエタノール大增産により、“エネルギー”と“食糧”とのトウモロコシの争奪が始まる

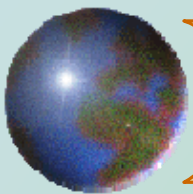
● ブッシュ大統領一般教書演説: エネルギー政策 (07. 1. 23)

- ①エタノールなど代替燃料の利用拡大: エタノール生産を05年35→2012年75→2017年350億ガロン(20%in10Y)に大幅拡大。ガソリンの消費量を15%削減。
- ②自動車の燃費規制強化(現行、1ガロン27.5マイル(1リッター11.1km))→5%ガソリン消費量削減(CO2排出を10年間横ばいへ)
- ③戦略石油備蓄の強化: 現行6億9,100万バレル(輸入量の55日分)→20年間で15億バレル



2017年までに
エタノール生
産を06年の50
億ガロン(1ガロ
ン=3.79L)から
350億ガロンに7
倍にする。

●エタノール100ガロ
ン生産→トウモロコシ
35ブッシェル



日本の穀物輸入について

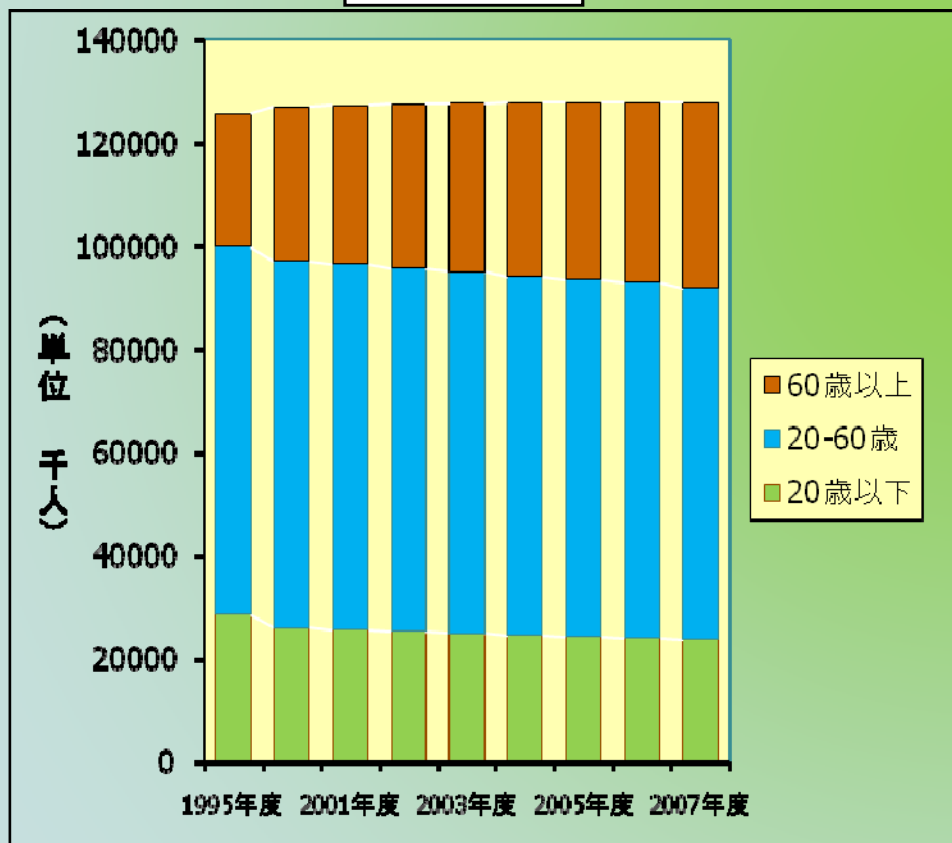
Marubeni

少子高齢化により現状穀物需要は横這いか微減。

日本の穀物輸入の2/3以上を占めるトウモロコシについて、今後中国が輸入国に転ずる可能性もあり、中国との争奪戦が始まる恐れがある。

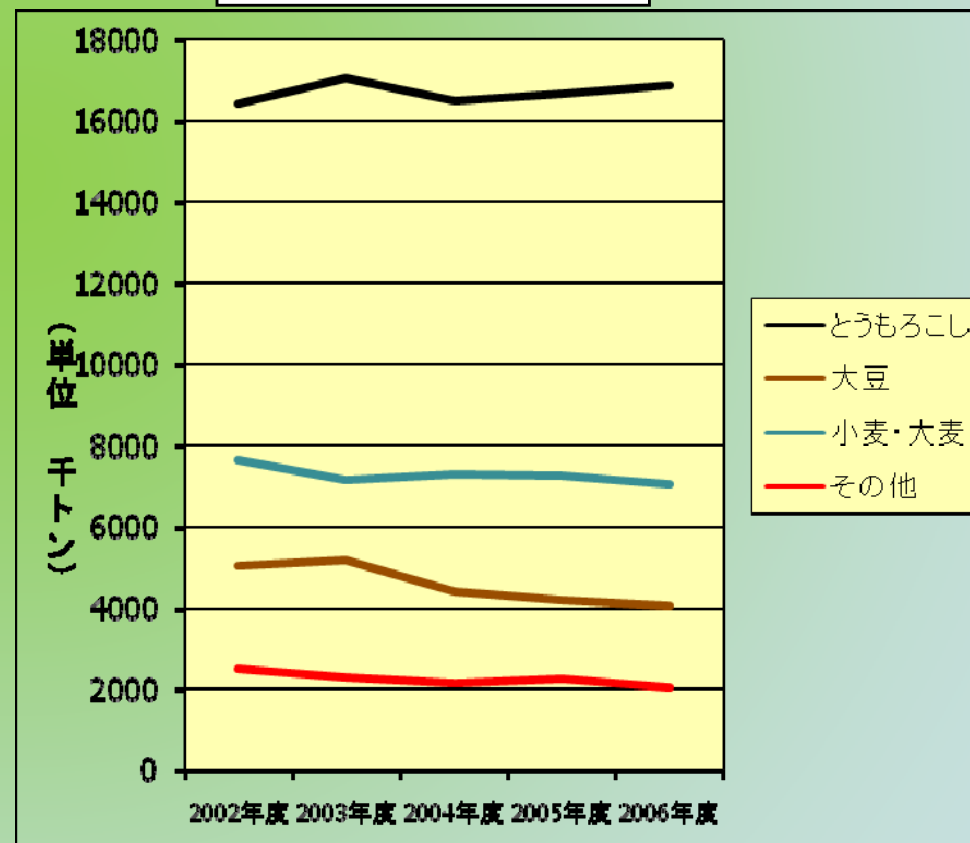
なお、日本の飼料の主原料はトウモロコシだが、安価な麦を代替原料として使用する必要がある。

人口分布

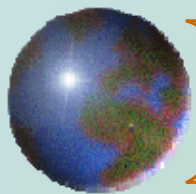


(資料)総務省統計局人口推計

日本の穀物輸入量



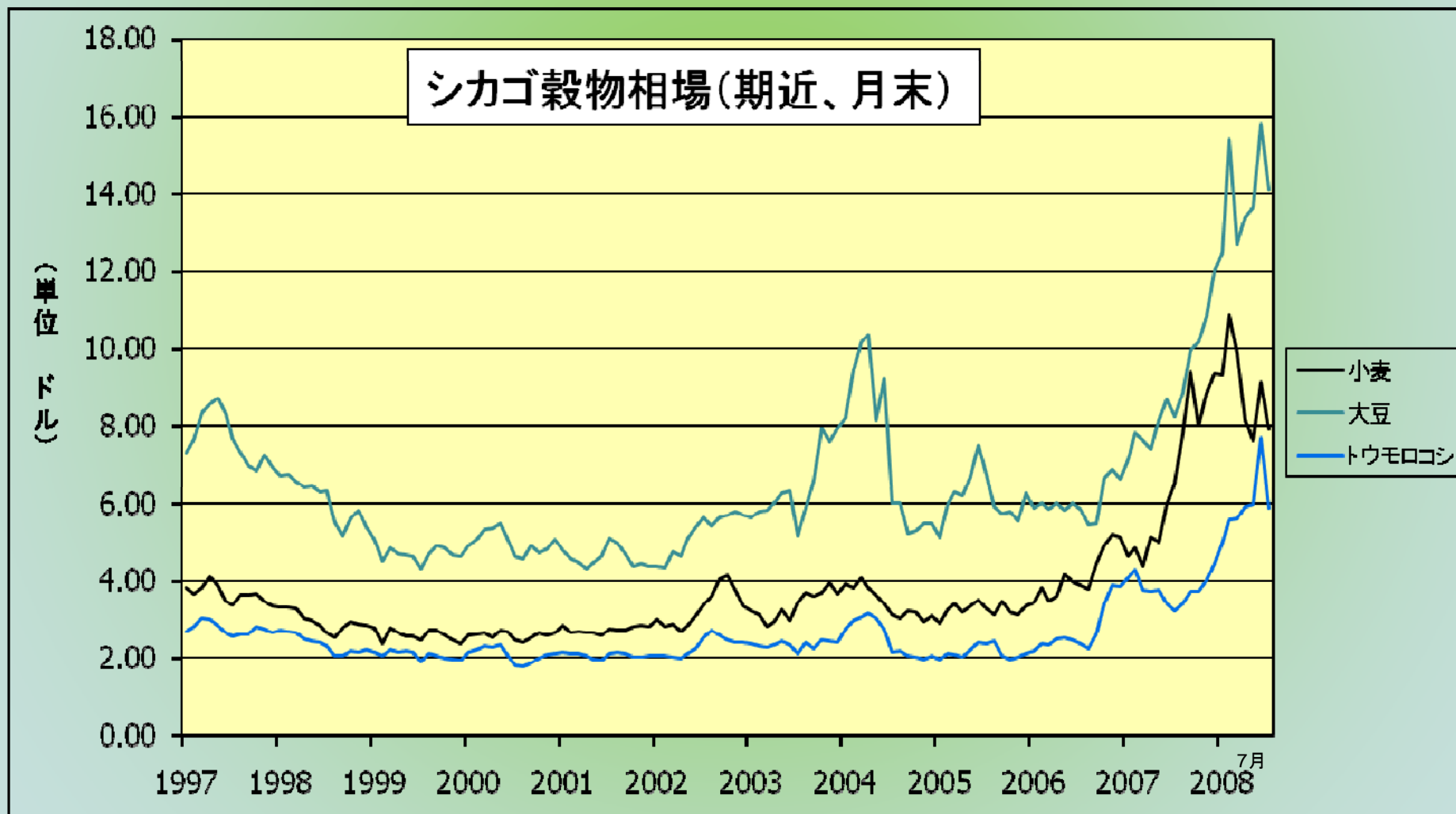
(資料)農林水産省農林水産物輸出入概況

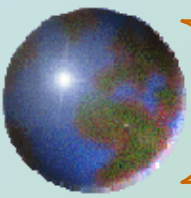


世界的供給不足から穀物相場が急騰

Marubeni

米国以外での穀物生産量は増加しているにもかかわらず、中国をはじめ消費量が増加した事により在庫率が下落。中東マネー等の投機資金に加え、中・短期的な生産量の増加が見込めない事より、近年相場が急上昇。





➤現状を纏めますと大きなポイントとしては以下の3点となります

□新興国等での需要の増大

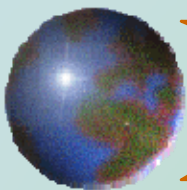
従来は先進国での需要が世界の需要と同義であったが、中国やインド等新興国において、人口増加や生活水準の向上により、近年穀物需要が大きく伸びている。

□トウモロコシの争奪戦

- ・トウモロコシは全世界生産の約40%、全世界輸出の約55%を米国にて賄っており、米国の生産も年々増加している。
(2001/2008年度対比+24%増)
- ・しかし、米国でのバイオエタノールの大増産、中国での大幅な需要増により、需給は逼迫する恐れがあり、近々“エネルギー”VS“食糧”、“国”VS“国”のトウモロコシ争奪戦が始まる可能性がある。

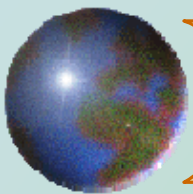
□トウモロコシに代わる代替飼料原料

トウモロコシの供給がタイトとなり価格が高騰している事を踏まえ、麦等の代替飼料原料を検討する必要がある。



当社の穀物分野について

(写真) Columbia Grain社輸出ターミナル



1950年：食糧庁向け食糧(大豆)輸入初成約。

：（以降食糧輸入を大いに拡大）

1967年：大洋漁業(現マルハ・ニチロホールディングス)などと合併で千葉市にサイロを設立。

：日本興油(現日清オイリオグループ)、全購連(現全農)と共に倉敷に西日本グレーンセンターを設立。(1969年4月竣工)

1969年：日本コンスターチと共同で中日本グレーンセンターを設立。

1971年：全農、日本通運等と共同で南日本グレーンセンターを設立。

1975年：米国において穀物集荷会社Western Grain Exchange Inc.を買収。

（その後 Columbia Grain Inc.に吸収）

1978年：米国ポートランドの穀物エレベーターを買収し、Columbia Grain Inc.を設立。

1990年：釜石に飼料コンビナートを稼働。(釜石飼料、釜石グレーンセンターを設立)

1997年：西日本グレーンセンターと南日本グレーンセンターを合併し、パシフィックグレーンセンターを設立。

2002年：ニッコー製油(当社子会社)、日清製油、リノール油脂が合併し、国内最大の搾油メーカー日清オイリオグループが誕生。(当社は15%出資となる)

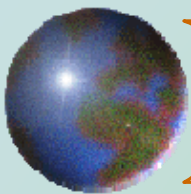
2003年：丸紅飼料(当社子会社)と日清飼料が合併し日清丸紅飼料となる。

2004年：穀物メジャー最大のADM社と飼料穀物・油糧種子の生産、輸入、販売について戦略的提携を行う。

2005年：ブラジル港湾ターミナル会社Terlog社に出資。

2006年：フランスの配合飼料・畜産物生産会社グロングroupと包括提携を締結。

2007年：北海道広尾地区にとにかち飼料・十勝グレーンセンターを設立。



食料部門 組織図 (2008年4月現在)

Marubeni

食料部門

管掌役員 : 代表取締役副社長執行役員 桑原 道夫
部門長 : 執行役員 岡田 大介

部門人員】(2008年4月現在)

部門員: 368名
役員2名、総合職309名、一般職57名
(総合職のうち、国内出向47名、海外出向41名)

穀物3ユニット

ユニット／部名

業務内容

主要事業会社

食料総括部

部門内企画、人事総務、事業会社管理、コンプライアンス

バイオマスプロジェクトチーム

バイオ燃料などバイオマス関連事業

食糧砂糖ユニット

麦、小麦粉、粗糖、砂糖関連商品

Columbia Grain International、東京製粉、東洋精糖

飼料・スターチ原料ユニット

飼料・スターチ用トウモロコシ、マイロ、大豆粕、魚粉

日清丸紅飼料、パシフィックグリーンセンター、丸紅エッグ、西日本飼料

油脂ユニット

大豆、菜種等、搾油用原料及び食品大豆、動物性油脂

日清オイルグループ、Terlogs Terminal Maritimo、Agrenco Bio Energia

飲料原料ユニット

珈琲、茶原料、果汁、ビール・ワイン原料、糖蜜、乳製品

丸紅食料、Iguace de Cafe、Vinas Argentinas

食品流通ユニット

菓子類、冷凍食品、調味料、食品加工・製造・物流

ナックスナカムラ、山星屋、ハセガワ

流通企画ユニット

食品流通事業の戦略的構築・推進

ダイエー、マルエツ、東武ストア、ストック、テンコーホレーション

農産ユニット

野菜、米穀、花卉、肥料等農業資材

ミツハシ・丸紅ライス

畜産ユニット

畜産(牛・豚・鶏等)関連製品、半製品

丸紅畜産、日本チャンキー、Rangers Valley、エスフーズ

水産ユニット

水産(鮭・海老・凍魚等)関連製品、半製品

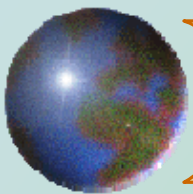
ベニレイ、丸幸水産、North Pacific Seafoods

大阪・九州食料ユニット

食品・原料全般

海外 支社・支店

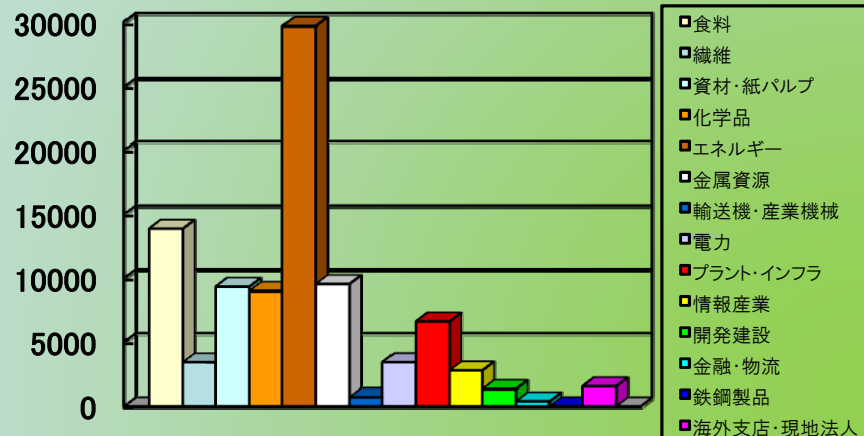
連結対象事業会社数: 合計約90社



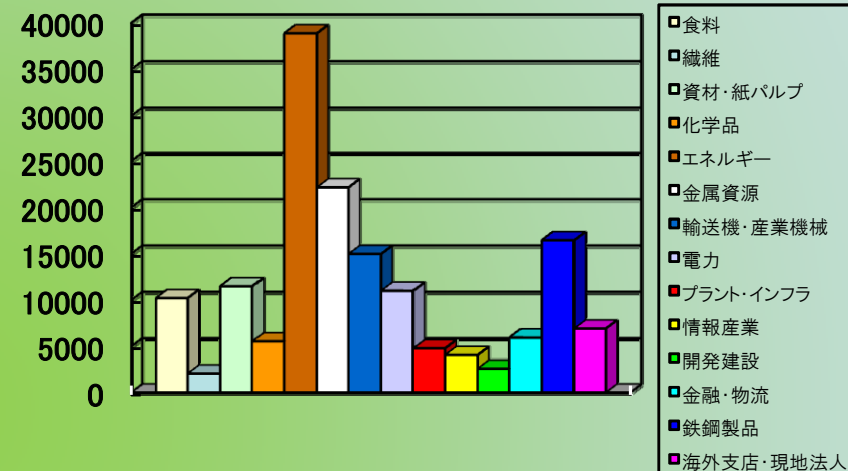
2007年度通期 部門別連結セグメント情報

Marubeni

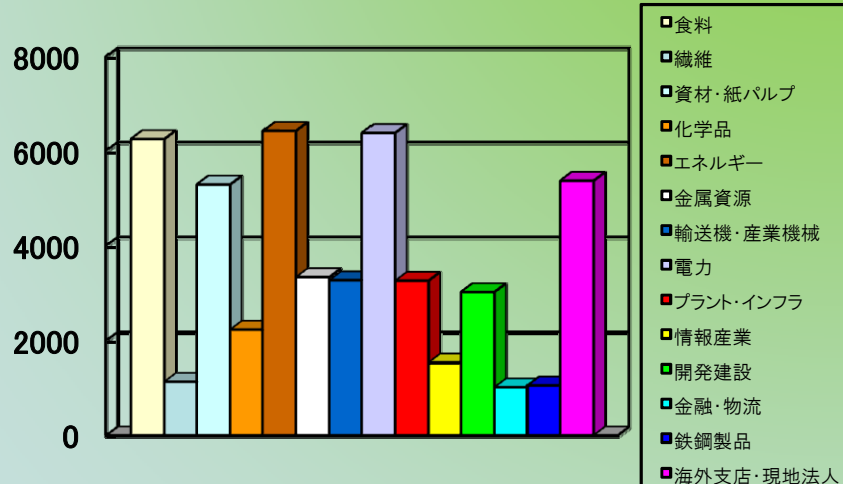
連結売上(単位: 億円)



連結純利益(単位: 百万円)



連結総資産(単位: 億円)

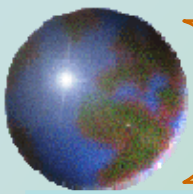


【食料部門 2007年度実績】

売上高 : 13,847億円

連結純利益: 102億円

連結総資産: 6,243億円



当社の穀物分野での強み①

Marubeni

➤ 日本各地にある輸入ターミナルと配合飼料工場



- 穀物サイロ
- ★ 配合飼料工場
- ▲ 搾油工場



日本向け年間取扱(商社系)

- ・コーン・マイロ シェア第1位
- ・小麦 シェア第1位
- ・大豆 シェア第3位

【日本各地に拠点を確保】

- ・穀物サイロ (保管能力 76万トン) 商社中最大
⇒ パシフィックグ레인センター(岡山/熊本/鹿児島)
釜石グ레인センター(岩手)
関東グ레인ターミナル(茨城)
中日本グ레인センター(愛知)
十勝グ레인センター(北海道): 建設中



- ・配合飼料工場 (生産量2.5百万トン)
⇒ 日清丸紅飼料グループ(J/V工場含む)
(北海道/青森/岩手/茨城/愛知/岡山/熊本/鹿児島)

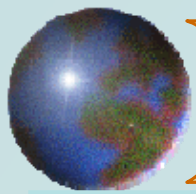
Marubeni Nisshin Feed Co., Ltd.

日清丸紅飼料株式会社

- ・搾油工場(搾油量210万トン)
⇒ 日清オイリオグループ
(神奈川/愛知/大阪/岡山/中国(大連))



輸入シェアで商社系1位で、かつ日本各地に拠点を持っている事は当社の大いなる強み



当社の穀物分野での強み②


Marubeni

➤日本最大のトレードオペレーション


日本向け年間取扱（商社系）


- ・コーン・マイロ シェア第1位
- ・小麦 シェア第1位
- ・大豆 シェア第3位


産地対策

 小麦・大麦・コーン・大豆
Columbia Grain International
(当社子会社)
米国西海岸最大の穀物輸出基地

 菜種
VITTERA社
との取り組み

 コーン・マイロ・大豆
穀物メジャーADM社
との提携

 大豆
世界最大の大豆産地

 アジア穀物商社
Heartland International Co.,Ltd.
【HIC】
(当社子会社)
台北、シンガポール、ソウル、
大連に拠点を持つアジア地域
の輸入販売エージェント

日本向けが
少子・高齢化による
需要構造による頭打ちの為、
中国・アジア向けに
拡大

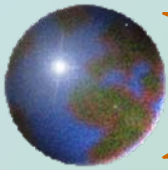
<<中国・アジア向け>>
韓国、台湾、中国、インドネシア向け等

HICにより中国・アジア地域での
3国間取引の拡大を行う



港湾ターミナル
会社
Terlogs社
(当社持分法適用会社)

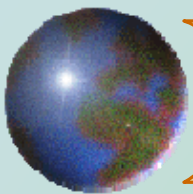




今後の展開について



(写真) Columbia Grain社シャトルトレイン



当社の世界販売戦略と産地対策

Marubeni

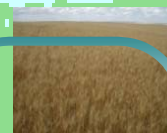
【戦略の両輪となる世界販売戦略と産地対策】

従来の対日輸入中心から全世界販売への飛躍を行うと同時に、穀物争奪戦に勝つために産地を押さえて量を確保する

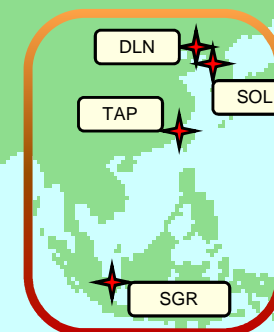
【産地】
米国中部・西部



【産地】
東欧・ロシア地域



中国・東南アジア市場
➢販売エージェントHIC
により3国間取引を拡大



中東市場
➢アブダビ商社
により新規市場
を開拓

ABU

【重点産地】

- ・北米西海岸
CGIIの港湾設備の拡
充、内陸への拡張
- ・南米地域
ブラジル内陸部への進出
- ・ロシア・東欧地域
新しい拠点の確保

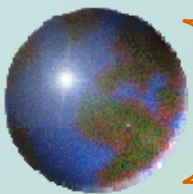
内陸へ

【産地】
ブラジル
アルゼンチン



【重点市場】

- ・中国・東南アジア市場
消費市場の拡大著しい市
場への参入
- ・中東市場
新しい販売地域の拡大



今後の展開について

Marubeni

➤3国間取引の拡大

- トウモロコシの3国間取引の2008年度取扱いは2004年度に比べ約4倍。
さらに3国間取引を増加させ、将来的には当社の強みである対日輸入取引に並ぶ柱とする。
- 大豆、小麦は対日輸入はこれ以上大きな増加は見込めないことから、3国間取引を増加させ収益を拡大。

➤今後の投資について

当社の世界販売戦略と産地対策を行うために2008年度、2009年度での2年間で約500億円の投資を予定。

➤分野別投資予定額

□世界販売戦略	100～200億円
□国内飼料戦略	100～200億円
□海外産地対策	100～300億円



上記投資を行う事より、
5年後には穀物分野で
連結純利益200億円超
を目指します。

